

22 ロレンゾの友達

アンドレ、サバイユ、ニコライ、わがなつかしき友よ。二十年ぶりの再会を楽しみにしている。いとしき故郷こきょうは変わらずにあるだろうか。あさつての十八日の夕刻ゆうこくとう着予定。二十年後の今も私わたしを友としてむかえてくれることを確信している。あの思い出の村外れのかしの木の下で。故郷こきょうでの幼き日々をともにした友へ。

ロレンゾより

「どうする。」

「どうするって。その話は本当のことなのかい。」

「まちがいない。三日前、この町の酒場に刑事けいじがやってきて、ロレンゾという男について聞いていた。働いていた会社の金を持ちにげしたらしいんだ。ここに立ち寄ったら知らせてほしい、そう確かに言ってたよ。」

「しかし、警察けいさつに追われていながら平気で、あさつてこの村に帰るって電報を打ってくるなんてことあるかな。」

「ぼくもそう思う。絶対何かのまちがいに決まってるよ。」

「ぼくだってそう思うよ。だけど、刑事けいじがそう言っていたのは確かなんだ。」

「信じられないなあ……。あいつがそんなことするなんて。やむにやまれぬ事情があつてのことなんだろうな。きっとそうだよ、きっと。」

「村外れのかしの木の下で会いたいなんて、考えように
よつては変だね。助けてほしいってことだろうか。」
「しかし、彼^{かれ}が会いに来たらどうしたらいいだろう。」

約束の日、三人はまだ日が高いころから、約束のかし
の木の下に集まり、ロレンゾが来るのを待った。三人は、
村に続く道のかなたに目をこらしたり、辺りをうろつい
たり、ため息をついたりして時を過ごした。やがて日が
かたむき、かしの木と三人のかげが長くのび始めた。し
かし、待ち望むロレンゾは現れなかった。

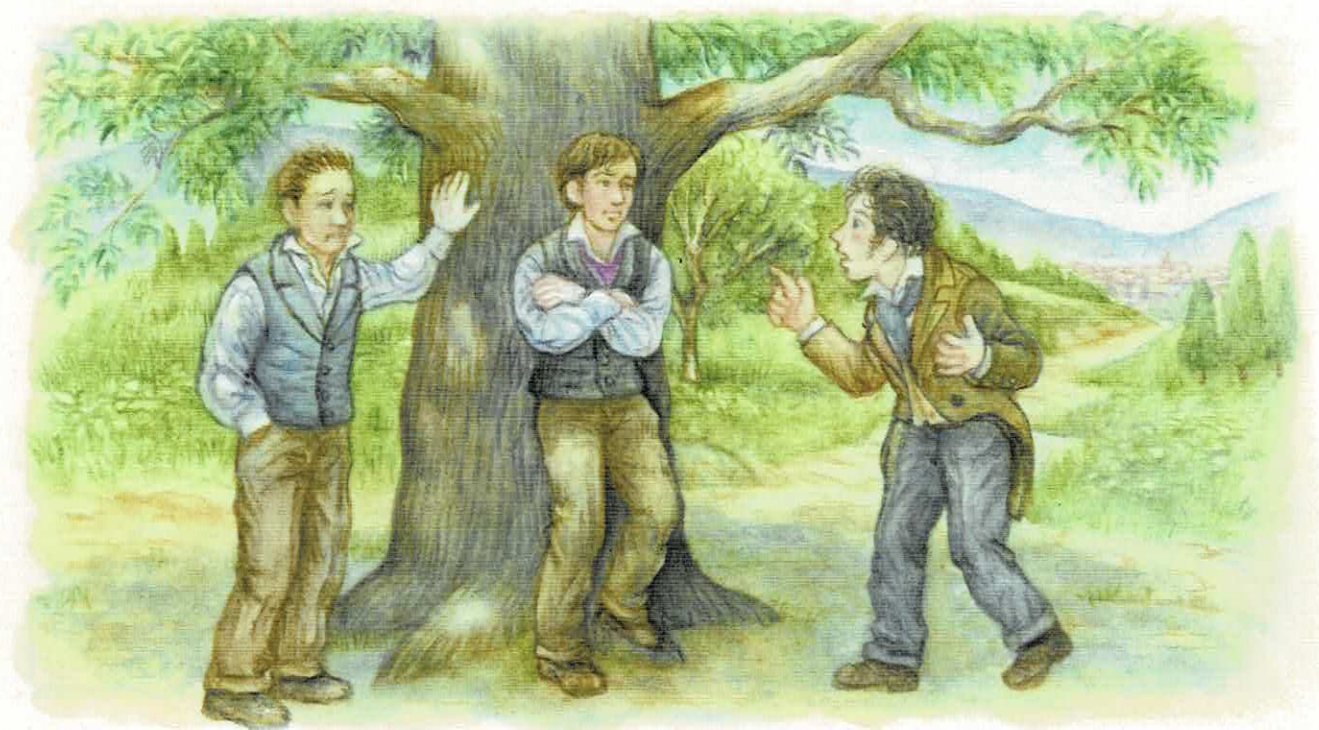
「おそいなあ。もしかして途中^{とちゆう}でつかまって……。」

「そのほうがよいのかもしれない。こんな状態では会い
たくないからな。」

三人とも複雑な思いにとらわれ、しだいに口数が減っ
てきた。重苦しいふん囲気を破るかのように、ニコライ
は言った。

二 「もうおそいし帰ろうか。来るとすればだれかの家だろ
うから。」

三 「しかし、もし夜中^{たず}に訪ねてきたらどうしよう。」
しばらくちんもくがあったあと、アンドレが口を開いた。



ア 「ぼくは、お金を持たせてだまってにがしてやる。いけないことかもしれないけど。」

サ バイユが続けた。

「ぼくはロレンゾに自首をすすめる。やっぱり罪は罪だよ。だけど、本人が納得しない場合は、そのままにがしてやったほうがいいと思う。」

ニコライは、苦しい表情で思いつめたように話し始めた。

「ぼくもロレンゾに自首をすすめる。本人が納得したらいっしょに付きそって行く。でも、だめだったら、ぼくは警察に知らせるほうがいいと思う。」

ア・サ 「それはかわいそうじゃないか。何もぼくたちがそんなことをしなくても、どこかでつかまれば同じだろう。どうして、そんな友達を裏切るようなことができるのか。」

アンドレとバイユは、おどろいたように言った。

ニ 「友達をかばってにがしてやるのも友達かもしれない。でも、そのことでびくびくしながらにげ続けたとしたら、かえって友達を苦しませることになる、とぼくは思う。」

ヤ 「ニコライの言うことは分かるよ。だけどぼくにはできないよ。ここまでにげてきたっていうのは、よほどの事情があるんだろうから。」

バイユがそう言い終わると、三人はだまりこんだまま家路についた。

結局その夜、ロレンゾはだれのところにも来なかった。三人の友は、それぞれねむられないまま夜を明かした。

自首
犯人が自分から警察などに罪を申し出ること。



翌朝、とつ然三人は町の警察署から、すぐに来てくれるようにという連らくを受^うけた。三人は、それぞれ緊張^{きんちやう}した顔で警察署にやってきた。

「君たちに、ぜひ私の立ち合いのもとで話をしたいという人がいるので、来てもら^{もら}ったんだが……。」

応対に出た署長^{しやうちやう}が言った。やがて部屋のおくのほうから男が現れた。

「ロレンゾ！」

三人はいっせいに声を上げた。

「昨日はすまなかった。となりの町まで来たとき、刑事^{けいじ}がいきなりぼくをここに連れてきたものだから、連らくがつけられなかったんだ。」

「私^{わたし}たちの手ちがい^{わたくし}で、大変ごめいわくをかけてしまつて……。」

署長^{しやうちやう}は深々と頭を下げた。

「まちがいだったんだね！」

「人ちがいだよ。ぼくは無実だよ。」

「本当に申し訳^{もう}ない。昨日の夜中に、私^{わたし}のところに連らくがあつてね。」

署長^{しやうちやう}は頭をかいた。三人はとにかくほっとした。アンドレは、ほほをゆるめながらロレンゾのかたに手をかけた。

「よかった、よかった。君は絶対にそんなことはしないと思つていたよ。」

「少しは、心配もしたけどさ。」

四人は大笑いしながら、あらん限りの力でだきしめ合った。

あらん限り
せいっぱい。

その夜、再会を祝って町の酒場へと向かった。思い出話はずきることがなかった。しかし、あのかしの木の下で話し合ったことは、三人とも口にしなかった。酒場を出たあと、それぞれに、もしロレンゾが本当に罪をおかして帰ってきていたとしたら、自分は友人としてどうすべきだったのか、どうしていたのだろうか、と改めて考え始めた。

考えよう 話し合おう

学習の道すじ

友人としてなやむ三人の思いを通して、
望ましい友情について考える。

- あなたなら、三人のだれの考えに賛成しますか。それはなぜでしょう。
- あらん限りの力でだきしめ合ったとき、三人はどのような思いだったのでしょうか。
- 望ましい友情とは、どのようなものだとか。

学習を広げる

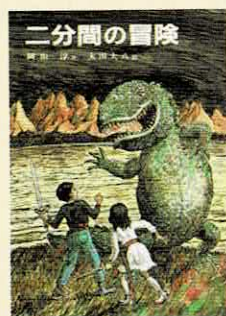
あなたは考えますか。

本のしよかい

本を読んで、友情について考えを深めましょう。



ぼくらのサイターの夏
作 笹生 陽子 / 絵 やまだ だいと・廣中 薫



二分間の冒険
作 岡田 淳 / 絵 太田 大八